アルファ・ズィリェカの回想

雪嶋悠

《ここまでのあらすじ》

別の世界領域（パラレルワールド）の観測方法がようやく確立され、世界領域の研究が進むなか、ある研究所に住みながら研究をする2人組の女性研究者がいた。観測の理論を筆頭に世界領域全体を研究するアルファ・ズィリェカと、観測のための技術と機械のくみ上げが専門のハル・イシュトゥルームである。時代の先を行く二人は遂に別の世界領域を観測するだけでなく干渉・改変することもできる観測機を開発するが、様々な思惑から二人だけの秘密とする。

彼女らは別世界領域観測を通して、「多くの世界領域でも共通して発生する事柄」の存在に気付く。そのひとつには、アルファとハルに相当する存在が惹かれ合うという現象もあった。特異と名付けられたこれら共通点への干渉が非常に困難であることから、アルファは世界領域の研究の新たな中核として喜ぶが、ハルの方は、自分がアルファに惹かれているのは「自分の意志ではなく、特異点として設定された当然のことに過ぎないのではないか」と苦悩する。

ある日ふたりは、現在知られている技術では不可能なはずのその特異が容易に改変されていくのを目の当たりにする。未知の改変者は、いくつもの世界領域で惹かれ合っていた女性たちを死という道具で引き裂いては、ハッピーエンドとして楽しむのだった。

詳しくは 同シリーズの過去作『朧百合夜』、『Digamma:草のむす壊れた夜の校舎で』、『ハル・イシュトゥルームの回想』をチェケラッチョだ！

［統一暦2883年　10月27日］

『では次のトピックです。昨日から各ニュースで話題になっている、AGW予想の解決。学会を震撼させているというこのニュースですが、そもそもAGW予想とはどんな予想なのか、そしてこの解決がどんな意味を持つのか、よくわからないという方もいると思います。かくいう私もそうです。そこでですね、その道に詳しい人を招きいろいろなことを聞いていくこのコーナー。今回もいつものように、専門家をお招きしています。こちら、西王都王立外世界領域研究所所長、アルファ・ズィリェカ氏です！　よろしくお願いします』

『よろしく』

『ではズィリェカさん早速なのですが、AGW予想とはなんなんでしょうか』

『えー……AGW予想は2336年にアスティム、ジルベール、ウィリアムズの三人が共同で発表した、複数の世界領域の関係に関する予想で、全員の頭文字からAGW予想と呼ばれます。領域同士の交流、という観点で最も重要なふたつの予想のうちの片方なので、私も驚きました。まず端的にその内容を言うとこうなります――アスティム仮想壁の固有強度を超える領域間往復力は存在しない』

『ち、ちょっと、知らない単語が多かったんですけれども』

『もちろん解説していくのでご安心を。まず、領域間往復力。これは字面通りで、簡単に言えば別の世界領域――

いわゆるパラレルワールドに、こちら側から干渉をかける力、というものです。別の世界領域と相互通信が出来るのかは、この力にかかっています。まあただ、この力がそもそも存在しないという意見もあります。このへんについては、実は近々一定の成果を発表出来そうなのでお待ちください。ちょっとした宣伝です』

『ははは、楽しみにしておきましょう。では今回の予想は、アスティム仮想壁の固有強度――そもそもこれがなんだか分かりませんが、これよりも強い往復力はない、ということを証明したわけですね』

『その通りです。ただ、強い往復力が存在しないというよりも、アスティム仮想壁の固有強度が強すぎることを証明したものです。アスティム仮想壁についてもご説明します』

『お願いします』

『ここでまず――世界地図を思い浮かべてください。われらが王国は東側に海を持つものの、その他は陸上の国境で他国と隣り合っていますよね。実は世界領域と世界領域は、あたかも国境のように隣り合っていることが知られています。この国境ならぬ世界領域境は実際の国境とは違い、この不連続面はまるで何の干渉も許さないかのごとく、ここを跨ごうとする力、つまり先程の往復力ですね、これを拒否します。国境に壁が、それも空気も音もまったく通さない壁が聳えています。この見えない壁を、アスティム仮想壁と言います。……ではこの堅牢な壁は、本当に何も通さないのか、という疑問がここで生じます。それがAGW予想です』

『ははあ、つまりこの国境の壁を越えて相手に干渉をかけることはできない、ということが証明されたんですね』

『そうです。今回このAGW予想を解決したエーリッヒ・フォン・クロース博士の出した結論は、固有強度の計算式数列が無限大に発散する――つまり、壁は本当の本当に何も通さない、ということです』

『なるほど、少しわかった気がしてきました。クロース博士は記者会見で、これで干渉は不可能であることが証明されたに等しい、と述べていましたが、そういうことだったんですね』

『ただ、私はまだ出来る可能性があると踏んでいます。クロース博士はもともと世界領域同士の交流や干渉は出来ないと主張する方ですから結論を急いでいますが』

『はあ、ちょっとどういうことかお聞かせくださいますか』

『はい。最初に、AGW予想は重要なふたつの予想のうちの片方だと言いました。そのもう片方が、シャグタッタル第三予想です』

『シャグタッタル……』

『ミハウ・バルトロメウ・シャグタッタルの名前は聞いたことがあると思います。われらが王国の誇る天才研究者ですから。彼は世界領域研究で多くの功績を残しましたが、特に優秀なのは理論家としての側面です。当時主流の主流とは大きく異なる観点から新たな主張をし、しかもほとんどは後に正しいと認められるものなのです。しかし、彼の没後から四半世紀が経った今も真偽がはっきりしていない、言わば最後の宿題があります。それこそがシャグタッタル第三予想です』

『それはどういうものなんでしょう』

『先程の国家と国境の例をもう一度思い出しましょう。国家同士が接触する場所、すなわち国境にアスティム仮想壁が形成されますが、しかし国家は陸だけで接しているわけではありません。海があります。実は世界領域の場合でも同じことが言える、つまり海のような空白の空間があるだろう、そして直接接していない以上、そこにアスティム仮想壁は存在しないだろう、というのがシャグタッタル第三予想です』

……

……

……

テレビに私が映っている。

「アルファったら、随分固まってるじゃん」

「仕方ないだろ。テレビはやはり慣れない。今度からはハルが出てくれ」

「残念ながら観測機理論はニッチすぎるわ」

「それもそうか」

昼。朝のニュースの録画を見させられながら、いつものようにハルの作ってくれる昼食を食べる。私の好物は麺類で、出来れば毎日麺類がいいのだが昨日食べたじゃんと言われて揚げ魚が出てきた。多くのスペースが資料や印刷物で埋められる中、食卓だけは食器以外置かないことになっている。ハルと二人で食卓を囲むこの時間は、私達の貴重なプライベートタイムだ。

「で、この録画。AGW予想は、まあ名前は聞いたことあったけど、ほんとに重要なの？　リップサービスとかじゃなくて？」

とはいえ、最近は食卓にも研究の話が持ち込まれがちだ。特に今日は。

「本当だよ。AGWがこんなに早く解決するとは思わなかった。しかもクロース博士が。最近の研究見た？　とっくにボケてるのにね。そもそも専門も違うし」

「その言い方って……まるで本当は違うとでも言いたげじゃないの」

「私はそう思う。あの耄碌博士にこんなやわらかい発想は無理だよ」

実際無理だろう。クロース博士も、五十代までは目を見張る功績を残し続けた優秀研究者だったが、寄る年波には勝てないのか、学説の発展についていけていないのか、すっかりフレキシブルさを失った全自動老醜晒し機になってしまった。最近は共和国の研究者でないというだけで新たな学説を拒否している。世界最高の頭脳とまで言われた男がこうも晩節を汚し続けているのは、正直直視に堪えない。

なんでそんなこと。ハルがそういう目線をしていたので、さらに付け加える。

「まあ、国家の威信だろうね。AもGもWも共和国の研究者だし、三人のおかげで共和国こそが世界領域研究の本場だ。他国は大きく後れを取ったが、最近になって優秀な人材が出始めた。AGW予想は共和国の研究者が半世紀も束になってなお解決できていない難題だが、もしそれを他国の研究者に解決されれば、世界領域研究の最先端の座を奪われてしまったことがとても分かりやすい形で示される。だから共和国が、それも共和国きっての重鎮エーリッヒ・フォン・クロースが解決したということになったのは、共和国と他国の研究競争という意味合いでもそこの重要性を持つ」

研究競争ねぇ、と呟いて、ハルはこう聞いた。

「研究競争ってやっぱりあるの？　私の居る観測機理論の世界は狭いから、学会とかはすごいアットホームな雰囲気になっちゃうけど」

「あるよ。観測理論の範疇で言えば、共和国が未だにこの分野の先頭ではあるが、最近はパラディウスやレルゲンみたいな馬鹿どもが幅を利かせてる。クロース教授の息子もただのボンクラだし、エーデルリッター先生が派閥争いに勝てなきゃ先は暗い。連邦はシャルトリューズ家が気を吐いてるがあとは無名。諸邦同盟はステパノフ以降優秀な人材がポコポコ出てるから、この先躍進するね。あとは……極東の東方連合か。遠すぎて大した情報は入ってこないが、特筆すべき学者は聞かない。最近近代化したばっかの国家だしね」

「シャルトリューズ家は知ってる。観測機技術・観測機工学の専門家が一人いるから。……それで、この国はどうなの」

「われらが王国は、シャグタッタルが早死にしたこと、悪名高きボンネビルが学会を牛耳ったことで一時期酷かった。あの大馬鹿の失脚があと五年遅かったら私は別の国で研究者になってたね。今は知っての通りシャロル会長のもと、テルクラッツィ教授やアイセンルーム氏が引っ張ってきたことで、落ち目の共和国に並ぼうというところまで盛り返して来ている。クロイツェルなんかはシャロル会長の愛弟子だしね。そしてそんな中で現れた王国のホープが、百五十年近い外世界領域研究史で最も重要な人物になれるほどの超逸材。そう、この私だよ」

自身の事を話すと、鼻が自然に膨らむのを感じる。私は天才だ。そして、それは無闇に韜晦するようなものでもない。周囲を馬鹿とは思わない。私が天才すぎるのだ。そしてそれを呆れたように苦笑して見せる、韜晦型の天才。

ハル・イシュトゥルームは、紛れもない天才である。そもそも、観測機理論の世界が狭いのは、それがとても難しくて誰もやりたがらないからだ。私達のような理論家はああだこうだと空論を並べ立てても、検証する機械は考案しない。観測機理論の専門家たちは新しい望遠鏡でも開発するかのように平然と新しい外世界領域観測機を考案するが、それはうんと離れた星の表面を顕微鏡のように小さいところまで見ることのできるほど性能のいい望遠鏡なのだ。

そしてこの女、ハルは、それを考案するだけでなく、形にして見せる。そしてその成果物は、理論も機械も、まるで数百年後の未来から来たのではないかと思えるほど、意味が分からない。正直に言えば、私がいくら天才と言っても、ハルに適うことはない。私の天才さの由来はあくまでも先見性で、私がいなくても三十、いや四十年後には誰かが成し遂げることを先取りしているに過ぎない。だがハルは違う。彼女がいなければ未来永劫こんな理論は生まれないのではないかと思うほどの独創性の塊なのだ。

だから憧れた。だから技術学校時代に声をかけ、タッグを組んだ。私のやりたいことに完璧に答えて見せる彼女を、改変者などに奪われるわけにはいかない。

「AGW予想が肯定的に解決された今、外世界領域への干渉が可能だとしたらアスティム壁の存在しない部分があるとしか考えられない。つまり干渉に成功したという事実から、第三予想は逆説的に肯定されることになる。『領域の海』を直接見つけられなかったのは残念だが」

残念とは言ったが、実際には残念なんて微塵も思っていない。シャグタッタル最後の宿題とまで言われる領域の海仮説が、正しいことが証明される。シャグタッタルが偉大な先人であることがまた証明されてしまった。

「どちらにせよ、領域学上の未解決問題のひとつをまたまた解決したわけだから。これでアルファ・ズィリェカの名前は燦然と歴史に輝くことになるよね。おめでとう」

「ありがとう。……どうした」

わたしを祝ってくれた彼女は、どうも何かを思い詰めているように見えた。

「あのさ。やっぱりアルファって、世界一の天才なんだよね」

「僭越……でもないね、当然その通りさ。それが？」

「じゃあ、アルファは特異改変が出来るの？」

「……」

痛いところを突かれたな、と思った。

その通りだ。この世界領域において、私達よりも優秀な改変技術を確立させている研究者などいないはずなのだ。だが、私達には到底不可能な特異の改変をやってのける何者かがいることも事実。であれば、考えられるのは、改変を私達よりもうまくこなす技術のある世界領域によるものという可能性だが、これも現在見つかっていない。ジル調でこの世界領域以上の数値を出せている世界領域は見つかっていないのだ。

どちらも考えにくい。しかし、どちらかしかありえない。でも、それでも、どちらにせよ。

「殺させはしない。絶対に」

私は決意を込めて、ハルの瞳を見据えてそうはっきりと言った。ハルはそれを聞くと突然顔を赤くして、

「な、なに、突然。別に言われなくたって、アルファならやってくれるってあたしは信じてるよ」

と、言ってくれた。

［統一暦2833年　10月28日］

日常通りの朝。だがしかし、日常そのものは変容を続ける。変化する要素、しない要素の集合で日常は作られる。

変わらないのは、朝食とその作り手。昨日は朝番組のコメンテーターとして王都の中央の方に早くから行くことになっていたせいでコンビニの弁当だった。あのニュース番組め、ゲストの分の食事なんだからもうちょっといいやつを用意してくれていいだろうに、一番近くのコンビニのやつだった。即席で用意したようにも見えるが、まあカップ麺とかでないだけマシというものだろう。

それに引き換えハルの朝食ときたら！　卵焼き、しかも試行錯誤の末に私が好きな味――甘め――に完璧に調整されている。胃袋を掴まれるとはこういうことなのだろう。

変わるものもある。今日から弟子が入るのだ。東方連合の大学の有望株で、名前は……いけない、忘れた。極東の苗字は言い慣れない。時間的にはそろそろ来てもいいはずだが、どうせハルが面倒を見てくれるし、私は研究に戻ってよいだろう。

昨日、各国の外世界領域研究の話をハルにしたが、その時は極東については知らなかったので、調べることにした。やはり目立った功績はほとんどないが、他国の研究を恐るべき速さでなぞり、基礎的な知識は完全に浸透していて、そろそろ独自の研究を始めていくようだ。特にサイノンジ氏という研究者は優秀で、アズライトの多元領域予想――予想自体は既に解決されている――の別方面からのアプローチが非常に興味深い。洗練はされていないものの、既出の証明方法よりも汎用性が高そうだ。年度末の国際学会に出席していたら是非話してみたいものだ。

国家の研究はこのサイノンジ氏が引っ張っているようで、

今度来る弟子も氏に師事していたらしい。有望株だから留学ということらしいが、大学で研究室持ってるテルクラツツィ教授のところにでも送ればいいのに、なぜ私なんだろうか。シャロル会長は『イゴール君は昔っから後進育成が下手なのよねぇ』と言っていたが、後進育成をしたことのない人間に任すのもどうなのだろう。クロイツェルでもいい。いいが、クロイツェルは仮想壁の第一人者にしてスペシャリストだから、ひょっとしたらオールラウンダー気味の私のところにオハチが回ってきたのかもしれない。

午後。件の弟子は既に来ていた。

「ズィリェカ博士！ お噂はかねがね聞いているっス！東方連合第一大学タケル・サイノンジ研究室から来ました。しばらくよろしくお願います」

あの弟子というか、新しい研究者仲間は、どうせ田舎のペーペーだと思っていたが、そうでもなさそうだ。だが、どうしても名前が覚えられない。いかにも東洋系と言った見た目の、背のやや低い眼鏡の女性である。カメラを携えているところだけを見れば、観光客ではあるまいかと言うようないでたちであるが、身体計測して作った特注のものだというよく似合った白衣と、端から端まで書かれたボロボロのメモ帳を数冊常に携帯しているさまは、見た目上何の疑問もなく背の小さいだけのベテラン研究者と判断できてしまうような姿だ。

弟子少女は世界領域どうしの接触についてが専門のようで、であれば留学先はクロイツェルでもいいし私でもいいのかもしれない。私は正確には観測理論の方が専門に近いが、領域間関係でも結果を出しているからだ。

領域間関係の研究はテオドール・アスティムが創始したものであるが、その後ナタリー・ウィリアムズ、ミハウ・シャグタッタルを輩出した後、シャグタッタルの急逝後はあまり進展がなかった。259年のレイモンド・ボンネビルによるシャグタッタル第一予想の解決(現在はさらに訂正が入っているのは知られている話だが)以降は、明らかに手詰まりの感があり、270年代初頭に数々の領域観測の結果が集積されたことでようやくブレークスルーがあった。その旗手になったのが私達の学校時代の恩師でもあったアイク・エーデルリッター先生の一連の研究で、これによってクロイツェルや私のような新進気鋭が活躍を始めたのだった。つまり、領域間関係の研究は中興状態にあって、群雄割拠である。だからこそ、アルベール・レルゲンのような頓珍漢野郎が幅を利かせている共和国は後退していくだろうし、東方連合のような新興勢力が割って入りやすいところでもある。弟子少女が正しく知識を持ちかえれば、東方連合は間違いなく躍進するだろう。

[統一暦2833年　10月31日]

やはりあの弟子少女、意外にも頭が回って優秀に思える。もうすこし学べば、極東はおろか、世界の研究者のなかでもトップクラスになれる。名前を覚えるのはあきらめた。ハルはちゃんと覚えただろうが。

今日は客人を呼んでいる。目的はいくつかある、弟子少女にその客人を紹介する気になったから、そして。行き詰っている特異研究の助言をもらうためだ。

「そろそろ来る頃じゃないかな」

「客人っスか。きっとセンセイの友達だからすごい人なんでしょうね」

「私ほどではないがな」

そう言うと流石っス！ と言って目を輝かす弟子少女と、そんな私達をちょっと呆れたように見るハル。すると玄関のチャイムが鳴って、ちょうどいいとばかりにハルが玄関の方に向かう。程なくして、ハルともう一人の女性が入ってきた。

「来たわよー」

私より背が高く、髪も長く、そして背中が曲がっていない。モデルでも出来そうなスレンダーさを誇る、私の盟友だ。弟子少女ははじめはピンと来ていない様子だったが、私が彼女と親しげに挨拶を交わすのを見て、心当たりを見出したようだった。

「この方はもしや」

「そうさ。紹介しよう、アウレリア・クロイツェル。王立第七大学准教授。専門は君と同じ領域間関係。私の先輩であり共同研究者だよ」

「君が噂のお弟子さんね。ハルちゃんから話は聞いてるわ」

「こ、光栄っス！ ウチの国でもあなたの業績はよく聞きます！」

私、ハル、クロイツェル、弟子少女の4人で机を囲む。それは食卓なんかよりもずっと厚くてそれっぽいやつだ。今日集まって貰ったのは、と言って話を切り出す前に、その静寂は破られる。クロイツェルだった。
「この前テレビで言ってた『一定の成果』とやらの自慢……いいえ、多分手詰まりになったところがあるから私を呼んだのね。察するに仮想壁の話かしら」
「そうだ。『一定の成果』は割ととんでもないから、容赦してくれ」

＊

「……とんでもなかったわ」
クロイツェルは、頭を抱えた。
「だろ」
「整理するわよ。まずあなたがハルちゃんと新理論を確立し、ついに改変を成功させた。AGWは証明されてるから、これによって間接的だけど領域の海の存在も証明できた。そして、ある事情で領域の海についての研究をしていて、そのためにWC仮想壁の第一人者である私を共同研究者にしたい、と」
「呑み込みが早くて助かる」
「ああ、そういうことだったんスね。ウチようやく分かりましたよ。センセイたち、『特異』とやらの話をすると随分に顔が険しくなるなあとは思っていたんスが」
弟子少女がこのことを知るのも実は初めてで、彼女の方はクロイツェルの整理によってようやくつながらなかった部分の補完が出来たようだ。彼女も彼女で、決して理解力が無いとは思っていないが、少し飛ばしながら話してしまった自覚はある。
「で、その事情っていうのは、こういう認識でいいかしら。調査の結果あなたたち以外の手による改変が認められたが、改変者は明らかにあなたたちよりも技術力が高く、くみ上げた理論の上では極めて困難なはずの改変を平気で行う。あなた以上の技術者がこの世界領域に存在するとは思えないが、しかしそれが可能そうな世界領域も発見されていない……」
「完璧。どうした、机に今にも突っ伏しそうな体勢で」
「突っ伏しそうにもなるわ。何よ、時代をどれだけ先取りしてるのよ……。で、それで？　私に何を求めているわけ？」
「う、ウチも信じられないっス。というか、これを一介の留学生が聞いてもいいんスかね、私なにも手伝えることはないと思うんスが……」
聞き手の二人はいずれも自信がないといった様子だ。しかし、クロイツェルは既にそう言った場面に何度も遭って――遭わせてしまっている。とはいえ、そもそもまだ研究の道に入って日が浅い弟子少女に至っては大転回もいいところだろう。大学の学部ではおそらくそんな話を聞くこともなかっただろうから。
「まず意見を求めたい。改変は私たち以上に技術を持ったこの世界領域の誰かによるものか、それとも未発見の世界領域によるものか、どちらだと思う」
「ウチが思うには、領域間関係学、観測理論のどちらを取っても、センセイ以上を行く学者がいるとは思えません。たとえば共和国のレルゲン氏とかいますが」
「まあ、私は天才だけど。だけど、私は四十年先取りしてるだけ。五十年先取りする天才がいたら、私はその人に勝てない」
「まあ、それはそうだけど。でも、外世界領域の改変は優れた理論と優れた機械の両方によってはじめて成るわ。ハルちゃん以上の優秀な技術者も必要よ」
「いや、あたしよりも優れた人なんてたくさんいると思いますよ」
「謙遜するなハル。私は四十年先を行くだけだが、君は……いや、なんでもない」
言えるかそんな恥ずかしいこと。
「そうよハルちゃん。あなたの専門の界隈はそもそも規模も小さいし。それにズイリェカ、私も別の理由で件の改変者はこの世界領域の人間じゃないと思うわよ」
「別の理由？」
「何度も言ってることだけど。あなたは心酔してるけど、そもそも王国外でのシャグタッタルの受容は芳しくない……いや、そもそもシャグタッタル第三予想を真剣にとらえてるのはこの国ぐらいのもの。第一予想と、そして第三予想も、王国の研究者が解決したし、第二予想を解決したのは共和国の学者だけどシャグタッタルの共同研究者が残りとして片づけたものに過ぎない」
「ちがうもん！　シャグタッタルすごいもん！」
「えっ、イシュトゥルーム教授、センセイってこんなになるんですか」
「アルファはシャグタッタルが世界中で信仰されてると信じてやまないの。あたしですら止められなかったから」
い、いや信じないぞ。最新の研究をすべて吸い取っているはずの東方連合からきた弟子少女がシャグタッタルを知らないから怒ったんだぞ。そうだそうだ、知らないわけがないんだぞ。

「とにかく、AGW予想の解決を以て、外世界領域への介入は不可能だって結論に達したと思っている学者は少なくないわ。そして彼らのうちの過半数はシャグタッタル第三予想を認めていないのではなく、詳しく知らない」
「成程、理由はともかく、クロイツェルは外世界領域の誰かによる犯行って思うわけだな」
「そうよ。お弟子さんとハルちゃんも同じ結論よね」
「はい」

ひとつの結論に達した。理由は納得いかないけど。……理由は納得いかないけど！
「では次の議論だ、別の世界領域によるものであれば、それが発見されていないのが問題になる。弟子少女よ、なぜ現在発見されている世界領域では改変は不可能と断言できる」
「はい、えーっと、発見されている全ての世界領域は、ジルベール式外世界領域文化水準調査法によれば、この世界領域よりも文化水準が低いからっス。なぜ文化水準が高い世界領域が見つかっていないのか、根拠ある説明は出ていないはずっス……よね？」
「満点の回答だ。では重ねて問う、個人的な意見としてなぜ見つかっていないと思う？」
「えー……それは、えっと、これは私の意見でもいいんですよね？　であれば、私はもともとこの世界領域以上の文化水準を有する世界領域が無いからだと思ってたっス。ですが、いま思うと、少し違うようにも思えます」
あ、別にこの世界こそが最高の知能であるっていう攻撃的な主張に与してはないっスよ、と念を押した弟子少女は、自身の故郷が東方連合だから出来るのかもしれない意見を語り始めた。
「ウチの故郷で支配的な宗教は、この国の言葉で言うところのアニミズム的な宗教でして、だからこその発想かもしれないっスが、改変が出来るとしたら、ウチらって神の世界だなって思うんス。というのも、改変される、見られる世界からすれば、超常的な技術で日常に介入されて、それを介入されたと感知することすら出来ないんスよね？　すくなくともウチの故郷では、そういうのを神の成すことと呼ぶんスよ。センセイ方は一神教ですし、そもそも科学者である以上神という言葉はお嫌いかもしれないっスが」

確かに、私は科学者として神の存在を信じない。だが、彼女の話はとても興味深かった。民俗学的、人類学的には十分に理解可能、あり得る話なのかもしれない。
「なるほどね、つまりお弟子さん、あなたは結論としては何を言いたいのかな？」
「ウチ達にその状況を当てはめるんス。つまり、この世界領域から見てより文化水準が高い世界領域は、私達から見て介入が出来るはずで、それは私達から見て神の世界ということになるんスよ。つまり、見つかっていないのではなく、感知できない」
「成程。神の世界には触れられない、もし理不尽な改変があったとして、我々はそれを神のいたずらとして甘受するほかない、と」

ハルはその話をよく理解しきれなかったようで、質問をしてくる。クロイツェルが、そしてそれに補足するように私が改めて説明をする。
「ごめんアルファ、つまり？」
「私達の世界領域を、一つの物語として消費している世界領域があるってことよ」
「そしてそこには、物語に加筆修正するような感覚で私達を不幸に陥れる、神気取りのヤツがいるってわけさ」

そう、神『気取り』だ。そんな奴は神じゃない。目上の者には絶対服従であるというルールに胡坐をかいている、たまたま上の世界領域に生まれただけの豚に、私達はめちゃくちゃにされることになる。それは、受け入れがたい。それに、なにより――
「ありがとう。では、弟子少女の仮説に対して、別の仮説を唱えてほしい。クロイツェル、ハル、どうだ」
「うーん。お弟子さんの意見は小説だったら納得できそうな話だけど、あいにく私達は学者だから、もうちょっと物理学的な説明がしたいのよね。領域の海が実在すると分かった以上、改変力は領域の海を伝わって改変される世界領域に伝わることになる。そこに改変や観測を拒否する力を置くことが出来たら……」
「領域の海に干渉して自分たちを外部から隔絶させているのではないか、という仮説か」
「その通りよ」
なるほどね、流石はクロイツェル、科学的だ。私としては、弟子少女の仮説よりも採用したいところだが、個人的感情は出来るだけ慎みたい。
「クロイツェル、その仮説を検証したい。どうすればいい」
「領域の海に力を固定することが可能かどうかの検証から。領域の海の研究は少ないけど、シャロル会長の先行研究があるわね」

[統一暦2883年　11月　日]

ははは

[統一暦2883年　11月10日]

あれから何日が経ったろうか、しばらくこの日記も更新していなかった気がする。あの日以降碌に落ち着けていない。

ようやく、気持ちに整理がついた。

先月の末から、領域の海に力を固定することが出来るかどうかを私とクロイツェルで研究していた。弟子少女にも計算などを手伝ってもらったし、ハルは料理などのサポートをしてくれた。

それでも、計算は難航した。そもそも、特異のそれに限らず、改変は困難だ。それは領域の海が力を減衰させるからだ。ちょっとした強さの力では、あっという間に減衰し続けて消滅してしまう。ましてや、そんな場に力を固定するには、本来の改変力どころではない強大な力を必要とする。何より、減衰に耐えうるには減衰以上に増大する必要があるだろうが、それをどうしたら生み出せるのが分からなかった。

結局、力を固定するためには力を持続させる必要があり、その持続に必要な力はどんどん増えていくことが分かった。その必要量の計算式が無限大に発散する場合、それは長時間の持続には無限の力が必要になることを意味する。つまり、不可能だということだ。

もし、領域の海に力を固定することが不可能だとすれば、それが意味するのは、クロイツェルの仮説が崩れ去ること、弟子少女の仮説のほうが正しいこと。弟子少女の仮説のほうが正しいなら、神の世界領域には触れられないということだ。

それに、なにより――

＊

「領域の海に、力を固定することは不可能」

あの日。最後の計算は、半ば絶望に身を浸しながらだった。これが駄目だったら。発散するならば。その先に残っているのは、それが「そういう仕組みになっている」という結論だ。

それに、なにより――この結論が示すのは、こういう事実だ。

たくさんの世界領域からなるこの宇宙は、技術的に優れている世界領域は観測できない。干渉できない。すなわち、明確な優劣が存在する。そういう物理学上の真理。この宇宙は、決して、平等などではないという、事実。

宇宙は、理不尽なのだ。

《追記》

神の世界領域の存在を認めるしかない。仕方ないことだ。受け入れたくないが、それ以外の説明は出来ないのだから。

であれば、目立つ動きをしている我々は、神の世界領域――高次世界領域と呼ぶ――とそこの神気取りの誰かにそろそろ目をつけられていると思っていいだろう。

ヤツは私とハルを、死という道具で裂こうとしてくるだろう。私達のどちらかは、そう遠くない間に、不幸のうちに死ぬのだろう。そういう風に書き換えられるのだろう。

だとしたら、嫌だ。

怖い。死ぬのがじゃない。ハルを残すことが。あるいは、ハルに置いて行かれるのが。離れ離れになるのは、嫌だ。

だが、改変者サマはそれもきっと込みで楽しんでいるのだろう。無駄な抵抗を、万策尽きた時の絶望を見たいのだろう。

であれば、そう簡単に潰しては来ないはずだ。そこにつけこむ。鑑賞の為の余裕という名の油断を突く。

死なない、いや、死なせない。

死ぬとしたら、私だ。

なぜなら私は、天才だから。